

期間を「中学・高校時代」と「高校卒業後第一子誕生まで」の2つの時期に分け、それぞれの期間での育児経験を5項目から測定した。回答形式は「ない」から「多い」までの4段階であった。

3) 手続き

保護者への質問票は保育所を通して配付され、約10日後に回収された。回収の際、プライバシー保護の目的から、母親用と父親用の質問票を別々の封筒にのり付けをして回収できるような配慮がなされた。

3. 結果と考察

1) 尺度の構成と父母（夫婦）間の差異

① 家族共感

「全く経験しない」を1点、「いつもある」を6点とし、主因子法による因子分析を行った。その結果、母子間共感、父子間共感、妻および夫から見た

夫婦間共感とも、首藤（1997）と同一の2つの因子（共有と分離）が見出された。各因子に対応した項目の得点の平均値を尺度得点とした。尺度を作成するにあたり、クロンバックの α 係数を計算した。表1にあるように、尺度ごとの内部一貫性は十分高いことが示された。

表6は尺度得点の平均値と標準偏差を示している。母親と父親は、子どもの心情に対し分離経験よりも共有経験を強く感じていた。また、妻も夫も相手との違いを意識するよりも相手の心情を共有する方が強いことを示している。父母および夫婦の差異を検定すると、親子においても夫婦においても、分離経験は父親（夫）の方が強いことが示された。親子間の場合、共有経験は母親の方が強かった。

② 育児感情

「全く感じない」を1点、「いつも感じている」を

表6 各尺度の平均値と標準偏差、および母親と父親（妻と夫）の差異

尺度	母親（妻）		父親（夫）		対応のある t検定の結果
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
親子間共感 1点～6点	共有 n=310	4.87 (0.56)	4.60 (0.66)		母>父 ***
	分離 n=307	3.32 (0.76)	3.45 (0.75)		母<父 *
夫婦間共感 1点～6点	共有 n=307	4.25 (0.78)	4.32 (0.77)		n.s.
	分離 n=307	3.20 (0.82)	3.41 (0.81)		妻<夫 ***
育児感情 1点～4点	充実感 n=309	3.39 (0.34)	3.16 (0.43)		母>父 ***
	不安感 n=312	2.49 (0.80)	2.18 (0.43)		母>父 ***
愛着行動 1点～5点	安定 n=312	4.24 (0.51)	3.85 (0.62)		母>父 ***
	依存 n=313	2.89 (0.88)	2.90 (0.78)		n.s.
	抵抗 n=310	2.75 (0.92)	2.67 (0.92)		n.s.
家庭内コミュニケーション 1点～3点	家族間 n=308	2.74 (0.29)	2.53 (0.41)		母>父 ***
	夫婦間 n=304	2.36 (0.41)	2.21 (0.42)		妻>夫 ***
第一子誕生までの 育児経験 1点～4点	中学高校 n=302	1.63 (0.82)	1.50 (0.68)		母>父 *
	誕生まで n=305	1.99 (0.95)	1.65 (0.69)		母>父 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4点と得点化し、18項目を主因子法による因子分析にかけた。その結果、母親と父親の両方において、想定された2つの因子(充実感と不安感)が見出された。各因子に対応する項目得点の平均値を尺度得点とした。表2に示されているように、各尺度の内部一貫性は十分高かった。

表6の平均値から、母親も父親も不安感よりも充実感の方を強く感じていること、および育児感情はプラスの側面もマイナスの側面も母親の方が強いことが示された。

③愛着行動

「めったに見られない」を1点、「たいていそうである」を5点と得点化し、主因子法による因子分析の結果、母子間と父子間の愛着行動の両方におい

て、予め想定された3つの因子(安定、依存、抵抗)が見出された。各因子に対応する項目得点の平均値を尺度得点とした。α係数は概ね満足のいくものであったが、父子間での不安定な愛着行動の尺度において、若干低くなる傾向(.5から.6程度)も認められた。

子どもは、母親に対して父親に対しても、安定した愛着行動をとることが多い(表6)。また、父親よりも母親に対して安定した行動を示すことが多い。別の見方をすれば、母親も父親も子どもの安定した愛着行動を強く意識していた。母親は父親よりも子どもの安定愛着を強く意識していた。

④家庭内コミュニケーション

会話や気づかいの少ないことを示す選択肢を1

表7 親子間共感と夫婦間共感の相関

n=302				n=308			
妻から見た夫婦間共感				夫から見た夫婦間共感			
		共有	分離			共有	分離
母子間共感	共有	.421 ***	-.102	父子間共感	共有	.650 ***	-.273 ***
	分離	.009	.336 ***		分離	-.151 **	.415 ***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表8 家族共感と他の家族要因との相関

n=285	母子間共感				妻から見た夫婦間共感			
			共有	分離			共有	分離
育児感情	充実感	.358 ***	-.268 ***	.396 ***	-.276 ***			
	不安感	-.054	.462 ***	-.097	.337 ***			
愛着行動	安定	.345 ***	-.124 *	.269 ***	-.055			
	依存	.125 *	.126 *	.126 *	.072			
	抵抗	.043	.260 ***	.040	.278 ***			
家庭内コミュニケーション	家族間	.278 ***	-.060	.351 ***	-.184 **			
	夫婦間	.157 **	.052	.410 ***	-.319 ***			
育児経験	中高時代	.038	-.129 *	.150 *	-.007			
	第一子前	.037	-.149 *	.037	-.035			

n=288	父子間共感				夫から見た夫婦間共感			
			共有	分離			共有	分離
育児感情	充実感	.523 ***	-.307 ***	.511 ***	-.322 ***			
	不安感	-.128 *	.436 ***	-.126 *	.449 ***			
愛着行動	安定	.493 ***	-.135 *	.482 ***	-.181 **			
	依存	.301 ***	.001	.161 **	.081			
	抵抗	.025	.252 ***	.030	.238 ***			
家庭内コミュニケーション	家族間	.252 ***	-.098	.317 ***	-.245 ***			
	夫婦間	.306 ***	-.145 *	.407 ***	-.469 ***			
育児経験	中高時代	.136 *	-.125 *	.068	-.148 *			
	第一子前	.144 *	-.107	.067	-.129 *			

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

点、多い選択肢を3点、その中間を2点と得点化し、母親(妻)と父親(夫)ごとに17項目での項目-全体相関を計算した。有意に達しなかった3項目を削除し、残った14項目で主因子法による因子分析を行った結果、母親と父親で共通する2つの因子が見出された。ひとつは日常的な家族との会話を示す因子であり、もうひとつは夫婦間での会話や気づかいに関係した因子であった。それぞれ「家族間コミュニケーション」因子、「夫婦間コミュニケーション」因子と命名した。それぞれの因子に対応した項目の平均値を尺度得点とした。表4にあるように、尺度の内部一貫性は十分高いことが示された。

表6の平均値から、母親(妻)は、家族に対しても夫に対しても、言葉をかけたり意思を伝えたりすることが多いこと、つまりコミュニケーションの程度が高いことが示された。

⑤育児経験

「ない」を1点、「多い」を4点と得点化し、2つの時期ごとに因子分析をした結果、母親と父親とも、5項目の育児経験は一因子構造であることが確かめられた。5項目の平均値を尺度得点(1点~4点)とした。表5の α 係数は内部一貫性がきわめて高いことを示している。

母親は父親よりもわずかに育児経験を多く持っていた。しかし、全体的に見て、母親も父親も自分の子どもを持つ以前にほとんど育児経験のないことが示された(表6)。

2) 家族共感と他の家族要因との関連

①父母(夫婦)間の相関

表7は親子間共感と夫婦間共感との相関関係を示している。母親(妻)と父親(夫)のいずれにおいても、子どもとの共有経験と夫婦間での共有経験、および子どもとの分離経験と夫婦間での分離経験との間に有意なプラスの相関のあることが認められた。また、相関係数の程度を見ると、母親(妻)よりも父親(夫)の方がそれらの関連性は強いことが認められる。この結果は首藤(1997)の知見とも一致している。つまり、母親(妻)は父親(夫)よりも、親子関係と夫婦関係を区別する意識が強いことを示唆している。換言すれば、母親(妻)よりも父親(夫)において、親子関係の満足感が夫婦関係のよさにつながる傾向が強い。

なお、表には示されていないが、母子間の共感経験の各側面は父子間でのそれと対応する側面と弱いながらも有意に相関していた。この関係は夫婦間共感においても認められた。これは、家族間の気持ちの交流としての共感関係の一端を示すものと

思われる。

②家族共感と他の家族要因と相関

表8は、家族共感と他の家族要因との相関関係を示している。母親と父親のいずれにおいても、子どもとの共有経験は育児の充実感および家庭内コミュニケーションの程度とプラスに相関していた。また子どもとの共有経験は子どもの安定した愛着行動と依存的な行動とプラスに相関していた。母親と父親のいずれにおいても、子どもとの分離経験は、育児の充実感とはマイナスに、不安感とはプラスに相関していた。さらに、子どもとの分離経験は子どもの不安定な愛着(抵抗)とプラスに相関していた。

親になる以前の育児経験との関係を見ると、父親において、育児経験は子どもとの共有経験と弱いながらも有意に相関していた。母親においては、育児経験は子どもとの分離経験と弱いながらもマイナス方向に有意に相関していた。父母で関係のパターンは異なるものの、親の準備期間での育児経験は、親になってからの子どもとの共感関係に何らかの影響を持つことが示唆される。

夫婦間共感と育児感情、愛着行動、および家庭内コミュニケーションとの相関関係は、親子間共感でのパターンと類似していた。多少異なるパターンは家庭内コミュニケーションにおいて見出された。つまり、妻と夫のいずれにおいても、コミュニケーションの程度は夫婦間の共有経験とはプラスに、分離経験とはマイナスに相関していた。

全体的に見ると、家族との感情の共有経験は、育児の充実感、子どもの安定した愛着行動、家族とのコミュニケーションの多さと関連し、分離経験は育児の不安感、子どもの不安定な愛着行動、コミュニケーションの少なさと関連していた。これらの結果は、家族の感情交流が、育児場面、会話場面、子どもの行動などの家庭生活の様々な局面と関連していることを示している。また、相関係数は強くても中程度のものであり、家族共感の測定が、内容的に妥当なものであり、また他の測定と並存する意義があり、さらに基準との関連性からも有効であることを示している。

3) 家庭の感情的風土としての共感関係

母親(妻)と父親(夫)のいずれにおいても、親子間共感と夫婦間共感の意味ある関係性を示していた。また、親子間においても夫婦間においても、母親(妻)と父親(夫)の共感経験は弱いながらも有意な関係を示していた。これらの結果は、家庭の中にある一貫した感情交流のパターンのあることを示唆している。これを確かめるために、母子間共

感、父子間共感、妻と夫から見た夫婦間共感の合計8つの尺度得点を主因子法による因子分析にかけた。固有値1以上の3つの因子が認められた。表9はバリマックス回転後の因子負荷量を示している。

表9 家族共感得点に関する因子分析結果

		(バリマックス回転後の因子負荷量 n=302)		
		因子1	因子2	因子3
母子間共感	共有	.040	-.001	.795
	分離	.251	.765	.014
妻から見た夫婦間共感	共有	.237	-.090	.800
	分離	-.122	.682	-.316
父子間共感	共有	.839	.095	.147
	分離	-.386	.524	.225
夫から見た夫婦間共感	共有	.818	.007	.166
	分離	-.580	.478	.025
説明済		1.995	1.571	1.473
寄与率		.249	.196	.184

因子1では、父子間および夫から見た夫婦間での共有経験（プラス）と分離経験（マイナス）の負荷が高い。因子2では、母子間と妻から見た夫婦間での共有経験の負荷（プラス）が高い。これから、因子1は父親（夫）の意識を通じた家族の一体感を示し、因子3は母親（妻）の意識を通じた家族の一体感を示していると考えられる。一方、因子2では、母子間、妻から見た夫婦間、父子間、それに夫から見た夫婦間での分離経験の負荷が高い。因子2は家族の感情的な分離感を示していると考えられることができる。

因子2が見出されたことは、家庭の中に空気のように存在する感情的な雰囲気もしくは風土が存在し、それは本研究で用いられた共感関係の測定からをとらえ得ることを示唆している。

■ 研究 2

1. 目的

思いやりも正義感も対人場面で自己制御された行動である。行動上は思いやり行動あるいは正当な自己主張という形で表現されることがあるものの、それらの心理的な過程を含めて直接観察することは難しい。そこで、研究2では、日常的に幼児と生活を共にしている保育者の観察を通して、思いやりと正義感を含んだ対人行動の発達を測定する。そして、家族関係が集団生活場面での対人行動とどのような関連にあるのかを検討する。

研究1の結果に基づき、家族要因として、母子間と父子間での共感経験を取り上げた。子どもの思

いやりと正義感の発達には、子どもが自己とは異なる社会的世界と遭遇し、自己と社会を協調させる機会が必要になる。一般的には対人場面での葛藤経験がこのような機会を提供することになる。家庭においてはしつけを要する場面がこれに相当すると考えられる。そこで、本研究では、しつけを要する子どもの行為に対する親のしつけの態度を家族要因に含めることにした。具体的には、子どもの行為に対して、母親と父親がどの程度子どもに自己制御を求めるしつけを行うかを調査した。

2. 方法

1) 調査対象者

埼玉県大宮市の4つの公立保育所の3歳児以上の幼児274名（女子136名、男子138名）が調査に協力した（研究1の保育所とは別）。平均月齢は60.4ヶ月であった。保護者対象の調査に協力した保育所を通して、幼児の保護者に調査用冊子が配付された。冊子は母親用と父親用を1セットとし、合計180部配付した。回収率は56.7%（102部）であった。したがって、対人行動調査の分析は274名の幼児、対人行動と家族要因の関係の分析は102名の幼児とその両親を対象にした。対人行動の評定者となった保育者は15名であり、平均勤続年数は12年（5年～24年）であった。

回答用紙には欠損値があるため、分析の対象者数は上記の数とは一致しない。

2) 調査項目

①幼児の対人行動調査

幼児の対人行動に関する25項目が作成された。それぞれの項目は、対人場面での自己主張的（表出的）な振る舞い、自己抑制的な行動、共感、思いやり行動、感情の制御、自己制御を欠いた行動に関する内容であった。表10は、尺度構成に使われた19項目を示している。保育者は担任する個々の幼児についてそれぞれの項目ごとに「きわめて少ない」から「頻繁に見られる」までの5段階で評定を行った。

②家族関係調査

親子間共感に関する15項目（研究1と同様）と、親のしつけに関する7項目が用意された。7種類のしつけ場面（表11）について、はみ出しを許容するかかわり方と、社会の決まりや親の期待を伝えそれに従うよう行動を変えたり制止したりするかかわり方（自己制御促進的な態度）の両極端の選択肢を示し、その中間的な2段階（選択肢は示されず評定値のみ）を含めた4段階で評定する形式を採用した。例えば、質問文「お子さんがゲームで一番

表10 保育者から見た幼児の対人行動に関する質問項目

		n=274
尺度名	α係数	質問項目
表出的協調	.854	友だちが困っているとき、頼まれなくても自分から進んで助ける(手伝う)。
		悲しい気持ちやくやしい気持ちを隠さず伝える。(無理な抑制をしない)
		友だちが悲しんでいると、気にかけて、同情したりする。
		うれしいことがあると、他の子や先生に話したがる。
		危ない遊びや悪いことをしている友だちに注意する。
		遊び相手と満足感、達成感を共有する。
		進んで小さい子や弱い子のめんどうをみる。
		いやなことやははっきり「いや」「ダメ」と言う。
		遊び相手と失敗した悔しさ、悲しみを共有する。
		他の子と自分の意見が合わないとき、自分の考えやアイデアを言う。
抑制的協調	.814	遊具を何人かの子とかわりばんこに使う。(自分の順番を待つ。)
		他の子のものが欲しくても我慢する。
		他の子に自分の順番や使用中の道具を譲る。
		他の子と意見が違ふとき、相手の意見を受け入れる。
利己・混乱	.765	いけないことをして注意されたときは、それを素直に受け入れる。
		相手の嫌がることをわざとする。
		相手のことを考えない衝動的な行動をする(強引に物を奪う、一方的にひきこもるなど)。
		保育者が見ていないところで、ずるいことをする。
いったん機嫌が悪くなると、なかなか直らない。		

※評定は5段階

表11 子どもの自己制御を促すしつけに関する質問項目

		n=120
尺度名		質問項目
子どもの自己制御を促すしつけ		お子さんがゲームで一番になりたくて、わざとずるいことをしたとき、あなたは
		お子さんが、バスや電車の中で感動の喜びを大きな声で話してきたとき
		お子さんが、くやしくてあなたに八つ当たりを(たたいたり、けったり)してきたとき、あなたは
		お子さんがブロックや積木で苦労して作り上げたものを片付けるのがいやで泣いているとき、あなたは
		お子さんが注意不足からジュースをこぼしたとき、あなたは
		お子さんが、叱られたくなくてうそを言ったとき、あなたは
		お子さんが、何かに失敗して泣いているとき、あなたは

※選択肢は子どもの心情を全面的に受容する「許容的」な態度から、社会の決まりや親の期待を言及し子どもの行動を制止(方向転換)しようとする「自己制御」促進的態度までの4段階にわかれていた。得点は7場面の中から自己制御促進的な態度を選択した数である。

になりたくて、わざとずるいことをした時、あなたは]—選択肢「一番になりたい気持ちをわかってあげる」(許容)と「ルールを守ることの大切さを教える」(自己制御)、質問文「お子さんがなにかに失敗して泣いているとき」—選択肢「失敗したくやしさを悲しみを分かってあげる」(許容)と「もう一度チャレンジするように励ます」(自己制御)。

3) 手続き

対人行動の調査票は保育所ごとに配付され、研究者から全体的な教示を受けた後、保育者ごとに評定作業にはいった。評定基準の変動をなくすた

めに、各保育者は3日以内で担当幼児分を評定し終えるように要請された。保護者への質問票は各保育所を通して配付され、約10日後に回収された。回収の際、プライバシー保護の目的から、母親用と父親用の質問票を別々の封筒にのり付けをして回収できるような配慮がなされた。

3. 結果と考察

1) 尺度の構成

① 家族共感

研究1と同様の手続きを通して、母子間と父子間

それぞれの共有経験得点と分離経験得点を計算した。

②幼児の対人行動

まず、「きわめて少ない」を1点、「頻繁に見られる」を5点と得点化した。次に、20項目を次に示す2種類の尺度に分類した。対人場面での自己主張的な行動と抑制的な行動、および共感と思いやり行動に関する15項目、利己的行動と未熟な感情制御に関する5項目である。最初の15項目について、項目-全体相関を計算し、すべての項目で有意に達することを確認した。そして、主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の因子2つを抽出した。バリマックス回転後の負荷量のパターンから、因子に対応する尺度を構成した。因子1には、思いやりを積極的に表現しようとする行動、自分の感情や考えの素直な表現、遊び場面での仲間との感情の交流に関連した項目の負荷が高かった。そこで因子1を自己主張的な自己制御が強く作用した協調的な対人行動の因子であると考え、「表出的協調」と命名した。因子2は、自分の要求を抑制した思いやり行動と他者の意見や考えの受容に関連する項目の負荷が高いことから、自己抑制的な制御の作用した対人行動の因子であると考え、「抑制的協調」と命名した。残りの5項目について、項目-全体相関を計算し、有意に達した4項目を因子分析にかけた。その結果、1因子であることが確認され、「利己・混乱」因子と命名した。

それぞれの因子に対応する項目の平均値を尺度得点とした。各尺度の内部一貫性は十分高いことが示された(表10)。

尺度得点の年齢差と性差を検定するために、幼児を年齢別のクラスに応じて、4歳児クラス以下の幼児と5歳児クラス以上の幼児とに分類した。そして、各尺度得点について、2(年齢)×2(性)の分散分析を行った。その結果、表出的協調 ($F(1, 255)=7.494, p<.01$) と抑制的協調 ($F(1, 266)=10.405, p<.001$) では年長児の方が有意に高いことが示された。また、抑制的協調 ($F(1, 266)=12.702, p<.001$) は女子の方が有意に高く、利己・混乱 ($F(1, 270)=10.388, p<.001$) では男子の方が有意に高いことが見出された。図1は年齢と性ごとの尺度得点の平均値を示している。

③しつけの態度

4段階の評定のうち、自己制御促進的な態度に近い2つの評定値のいずれかを選択した場合、1点と得点化した。7場面を通じた合計得点を尺度得点とした(0点~7点)。母親と父親の得点を比較すると、母親(M=4.33, SD=1.48)よりも父親(M=4.94,

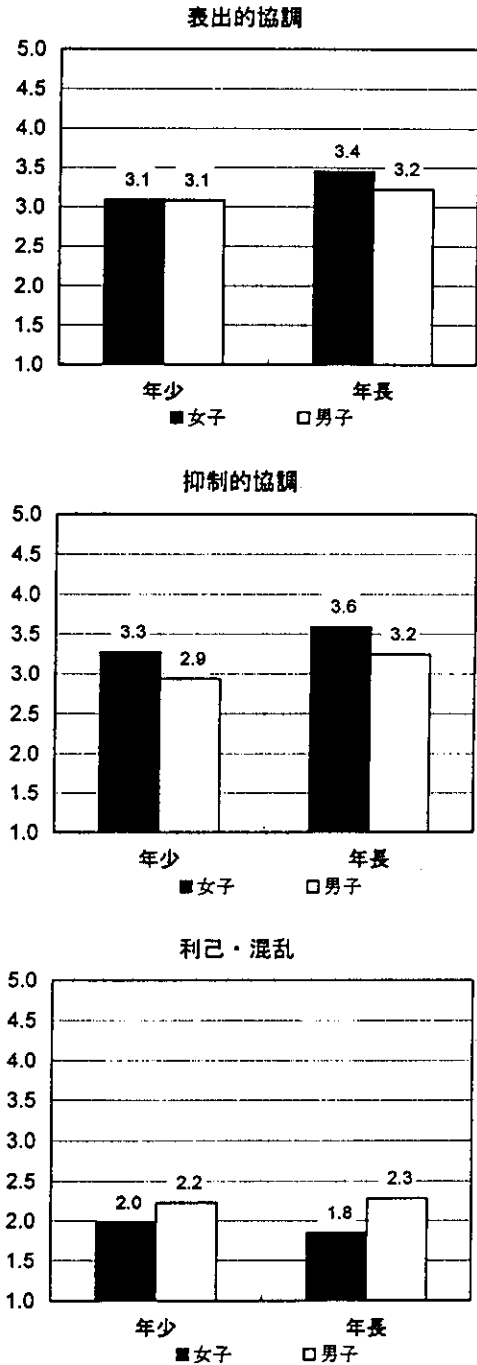


図1 保育者から見た幼児の対人行動の平均値

SD=1.51)の方が自己制御を求めるとかわり方の強いことが示された ($t(96)=3.338, p<.01$)。また、母親と父親の得点について、2(年齢)×2(性)の分散分析を行った結果、母親の得点だけで年齢の主効果が有意になった ($F(1, 92)=3.74, p<.06$)。図2のように、年長の幼児の母親はより自己制御促進的なしつけの態度をとる傾向が認められた。

2) 幼児の対人行動と関連する家族要因

幼児の対人行動と家族要因との関係を分析するために、まず単純な相関係数を計算した。表12は、

表12 幼児の対人行動と家族要因との相関

	女子 n=40	幼児の対人行動		
		表出的協調	抑制的協調	利己・混乱
母子間共感	共有	-.106	-.322 *	.185
	分離	.044	.011	-.198
父子間共感	共有	.014	-.452 **	.124
	分離	-.114	.080	-.074
自己制御の しつけ	母親	-.095	-.087	.052
	父親	-.082	.240	-.218

	男子 n=42	幼児の対人行動		
		表出的協調	抑制的協調	利己・混乱
母子間共感	共有	-.194	-.290 +	.005
	分離	-.161	-.241	.138
父子間共感	共有	-.128	-.222	.182
	分離	-.003	-.025	.366 *
自己制御の しつけ	母親	.121	-.075	.342 *
	父親	.258 +	.257 +	-.189

+ p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

対人行動に関する3つの得点と、親子間共感および自己制御のしつけに関する得点との相関係数を男女別に示している。全体的に見て、幼児の対人行動と親子間共感および自己制御のしつけとの相関は、幼児の性と親の性の組み合わせによって異なっている。女子の表出的協調と利己・混乱は、どの得点とも有意な関係を示さなかった。一方、女子の抑制的協調は、母子間と父子間での共有経験と有意にマイナスに相関していた。男子の表出的協調と抑制的協調は父親の自己制御のしつけとプラスに相関する傾向が認められた。男子の抑制的協調は、母子間での共有経験とマイナスに相関する傾向も認められた。男子の利己・混乱は父子間での分離経験と母親の自己制御のしつけとプラスに相関していた。

次に、親子での共感経験と親のしつけの態度が幼児の集団生活場面での対人行動に影響するという因果関係を想定し、重回帰分析を行った。表13は、幼児の月齢、共感関係に関する4つの得点、および自己制御のしつけに関する2つの得点を独立変数とし、対人行動に関する3つの得点のそれぞれを従属変数とした重回帰分析での標準偏回帰係数(β係数)を示している。女子の表出的協調には共感としつけに関するどの要因も有意に影響していない。女子の抑制的協調には父子間での共有経験がマイナスに寄与する傾向が認められた。女子の利己・混乱では重相関係数が有意に達しなかった。

男子の表出的協調には父親の自己制御のしつけが有意に寄与する傾向が認められたが、全体としての重相関係数は有意に達しなかった。男子の抑制的協調には、母子間での共有経験がマイナスに寄与していた。また、母親の自己制御のしつけもマイナスに寄与し、逆に父親の自己制御のしつけはプラスに寄与する傾向が認められた。男子の利己・混乱には、父子間での分離経験と母親の自己制御のしつけがプラスに寄与していた。また、父親の自己制御のしつけはマイナスに寄与していた。

男女で共通に見られたパターンは、表出的協調には親子間共感がほとんど影響していなかったことである。積極的な思いやり行動と正義感に基づく主張的行動は表出的協調因子に含まれていた。これは、家庭での親子の感情交流と親のしつけ方は、子どもの集団生活場面での思いやりと正義感に直結するのではないことを示唆している。子どもは仲間や保育者との葛藤経験やその解決経験を積む中で、自己主張的な対人行動スキルを獲得すると考えられる。親子の共感関係や親の自己制御のしつけは、子どもの対人行動ではなく、対人場面に参加する子どもの態度と関係するのかもしれない。

男女で異なったパターンも見出された。まず、女子の抑制的協調には父子間での共有経験がマイナスに寄与していたのに対し、男子の抑制的協調には母子間での共有経験がマイナスに寄与していた。

表 1 3 幼児の対人行動を従属変数、家族要因を独立変数とした重回帰分析の結果

女子 n=40		幼児の対人行動			
		表出的協調	抑制的協調	利己・混乱	
重相関係数		R=.572 p<.06	R=.570 p<.06	R=.405 n. s.	
月齢		.564 **	.290 +	.081	
独立変数	母子間共感	共有	-.188	-.245	.149
		分離	.006	.006	-.299 +
	父子間共感	共有	.064	-.343 +	-.102
		分離	.020	.102	.003
	自己制御のしつけ	母親	-.143	-.078	.117
		父親	-.199	-.037	-.372 +
男子 n=42		幼児の対人行動			
		表出的協調	抑制的協調	利己・混乱	
重相関係数		R=.516 n. s.	R=.642 p<.01	R=.625 p<.05	
月齢		.300 +	.323 *	-.105	
独立変数	母子間共感	共有	-.100	-.297 *	.053
		分離	-.254	-.249	-.057
	父子間共感	共有	-.019	-.114	.088
		分離	-.028	.019	.390 *
	自己制御のしつけ	母親	.019	-.281 +	.467 **
		父親	.330 +	.363 *	-.421 *

+ p<.1 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

つまり、父親が娘の心情を共有する経験は娘の自己抑制的な対人行動を弱め、母親が息子の心情を共有する経験は息子の自己抑制的な対人行動を弱めるという結果である。親が子どもとの関係の中で共有経験を多く持つと意識する背景には、実際の家庭生活の中でも、子どもの心情を理解し行動を受容しようとする養育環境があると考えられる。親の共感的なかわり方は子どもの思いやりの発達にとって必要であると思われる。しかし、少なくとも本研究の結果は、子どもの抑制的な対人行動が、異性の親との一体感の環境からは獲得されないことを示している。

母親と息子の同様な関係は、自己制御のしつけについても見出された。母親の自己制御のしつけは息子の抑制的な対人行動を弱め、利己的あるいは制御を欠いた行動を強めていた。逆に、父親の自己制御のしつけは息子の抑制的な行動を高め、利己的な行動を弱めていた。これらの結果は、息子の自己制御の獲得にとって、父親が社会的ルールを提示したり、子どもを励ましたり、論じたりする環境が必要であることを示している。逆に、母親がこのような環境を作り出すことは、逆効果であるこ

とも示している。これは、父親を道具的役割、母親を情緒的役割と見なす古典的な性役割の考えと一致する方向にある。しかし、男子だけで見られた関係であること、情緒的役割のひとつである母親の共有経験は男子の抑制的な行動を弱める結果も見られたことを考慮すると、親子関係と子どもの対人行動との関係性は古典的な性役割の見解に示されているほどには単純なものではないと思われる。

■ まとめと今後の課題

本研究は、共感経験から家族関係をとらえる試みを発展させ、家族の感情交流が育児場面、会話場面、子どもの愛着行動などの家庭生活の様々な局面と関連することを報告した。そして、それぞれの家庭には感情的な雰囲気が存在し、家族の共感関係を把握することにより、その感情的な風土をとらえ得ることを示した。

幼児の思いやりと正義感を自己制御された対人行動と見なし、それを保育者の観察を通して測定した。そして、親子の共感関係と親のしつけの態度は、幼児の対人行動とどのように関連するのかわ

分析した。親が単にやさしくすれば思いやりが育つのではなく、逆に厳しく接すれば正義感が獲得されるのではない。親の性と子どもの性によって、同じ家族要因が幼児の対人行動と異なった関係を示すことを報告した。そして、男子にとって、父親の共感と自己制御のしつけが重要になることを示した。

本研究の結果は、幼児期の思いやりと正義感の発達に関する心理学的知見を提供するだけでなく、保育所等において子育て相談など家庭と保育所との連携に関する仕事に携わる保育者にとっての基礎的資料にもなるであろう。

今後は、本研究の調査結果を踏まえ、実際の家庭の中での親子の間やきょうだい間での葛藤場面を観察し、どのような場面でどのような対立が起き、どのように解決されていくのかといった文脈をとらえる必要がある。この対人間の葛藤の文脈は、子どもの思いやりと正義感の発達環境として機能すると考えられる。その文脈の中で親は子どもにどのような期待や規範を伝えようとするのか、子どもは文脈の中でどのような意味を感じ取っていくのかを分析する必要がある。また、保育所での仲間および保育者との葛藤場面についても同様な検討を加える必要がある。

参考文献

- 1) 首藤敏元 1995 幼児の向社会的行動と自己主張—自己抑制 発達臨床心理学研究(筑波大学心理学系), 7, 77-86.
- 2) 首藤敏元 1997 乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討 厚生省心身障害研究 効果的な親子のメンタルケアに関する研究(平成8年度研究報告書), 255-261.
- 3) 首藤敏元・馬場康宏・鈴木亮子 1993 母親の愛着スタイルと育児感情に関する研究 発達臨床心理学研究(筑波大学心理学系), 5, 29-37.
- 4) 首藤敏元・利根川智子 1994 幼児期における母子の愛着スタイルと子どもの社会的コンピテンス 発達臨床心理学研究(筑波大学心理学系), Vol.6, 29-42.

親子相互交渉と情動反応に関する研究

分担研究者 陳 省 仁
(北海道大学教育学部教授)

研究要旨 乳幼児期において養育者との相互交渉における情動の制御の過程はのちの人格形成及び対人関係のみならず子どもの認知的発達にも大きな影響を及ぼすのである。本研究は就学前までの子どもと養育者との日常生活でのコンフリクト場面に焦点を当て、短期縦断法を用いて、子どもの情動反応と養育者のしつけ方略との関係を明らかにしようとする。初年度は調査・面接用紙の作成と縦断観察の内容を決めるため、少数の1.5と3歳児とその母親に面接を行い、コンフリクト場面についての情報を得た。

■ 研究目的

乳幼児期の基本情緒の形成とその障害の発生のメカニズムを解明するための基礎データを提供するためである。本研究は質問紙及び面接観察法を短期縦断的に用いて1.5歳から就学前の幼児が日常養育者との相互交渉の中にコンフリクト場面に於けるそれぞれの情動制御のパターンと関連や障害の発生パターンを明らかにする。

■ 研究方法

1. 被験者

札幌市内に在住し、幼児を持つ母親59名。子どもの月齢は14ヶ月から37ヶ月、平均25.5ヶ月である(男児30名、女児29名)。

2. 方法

子どもの日常生活におけるコンフリクト場面面接用紙を作成し、実施した。内容は、日常の様々な場面において、子どもの機嫌が悪くなるかどうか、又その時の母親の感情や対応とそれに対する子どもの変化について、また、子どもの情動的特徴(怒りやすさ、恐れやすさ)や扱いやすさに対する母親の認知などについて尋ねるものである。実施は訓練された2名の面接者が行った。被験者のうち30名は被験者が面接室に来室し、29名は面接者が家庭に訪問して実施した。

■ 結果と考察

1. コンフリクト場面

機嫌が悪くなる子どもが多い場面は、友だちやきょうだいと遊んでいるとき(以下遊び場面: 81.4%)、眠たいとき(81.4%)、歯磨きやお風呂など生活習慣のしつけのとき(以下しつけ場面: 71.2%)、買い物(以下買い物場面: 67.8%)などである。それに対する母親の感情は、遊び場面・眠たいとき・しつけ場面などでは、仕方がないというもの、嫌だ・またかという否定的感情がそれぞれ同程度みられた(2~3割)が、買い物場面においては半数以上の母親が否定的感情を持ち(54%)、仕方がないと感じる母親は少なかった(10%)。母親の介入(様子をみるを含む)によって、ほとんどの場合子どもの機嫌は治ることが多いようである。

2. 母親の認知

子どもの怒りやすさ、恐れやすさ、扱いやすさについての母親の認知の評価得点の分布はほとんど同じであった。怒りやすさと恐れやすさの認知には負の相関($r=-.257, p<.05$)がみられ、扱いやすさと関連がみられたのは怒りやすさであった($r=-.387, p<.01$)。母親が扱いづらいと感じている子どもは、母親から怒りっぽい子どもと判断されている。扱いやすさと恐れやすさに対する認知には関連がなかった。

3. コンフリクト場面と子どもの特徴に対する認知の関連

子どもの扱いやすさの認知に影響するコンフリクト場面は買い物場面である。買い物場面で機嫌が悪くなる子どもは扱いづらいと評価される傾向があり(扱いやすさ得点:機嫌悪群 平均3.4, S.D. 1.0, 機嫌良群 平均3.9, S.D. 0.7; $F=3.6, p<.10$)、介入後も機嫌がいつも治らない子どもは、機嫌がいつも治る子どもや時によっては治る子どもに比

表1 食事場面

	悪くなる	悪くならない
1歳児	11	18
2・3歳児	5	25

表2 買い物場面

	悪くなる	悪くならない
1歳児	23	6
2・3歳児	17	13

表3 遊び場面

	悪くなる	悪くならない
1歳児	11	18
2・3歳児	5	25

べて扱いづらいと評価されている(扱いやすさ得点:治る・時による群 平均3.6, S.D. 0.8, 治らない群 平均1.5, S.D. 0.6; $F=28.6, p<.01$)のである。

怒りやすさに対する評価も買い物場面と関連する傾向がある。買い物場面で介入後も機嫌が治らない子どもは、機嫌がいつも治る子どもや時によっては治る子どもに比べて怒りやすいと評価される傾向があった(怒りやすさ得点:治る・時による群 平均2.7, S.D. 1.0, 治らない群 平均3.8, S.D. 1.3; $F=3.2, p<.10$)。

また、買い物場面で機嫌が悪くなる子どもは恐

れやすいと評価されない傾向があった(恐れやすさ得点:機嫌悪群 平均3.0, S.D. 0.8, 機嫌良群 平均3.5, S.D. 1.1; $F=3.2, p<.10$)。恐れやすい子どもは行動抑制傾向が強い子ども、すなわち、新奇な場面に対しては否定的な反応を示したり、行動を抑制したりする子どもであると考えられる。このような子どもであっても、いつも出かける慣れた店であれば恐れが強く表出されることもなく、また行動抑制的であるために、かえって親のしつけや要求に対して否定的な反応が現れることが少なくなるため、このような結果が得られたと考えられる。

4. 発達的变化

子どもの機嫌が悪くなるかどうかについて発達的变化がみられた場面は買い物場面と遊び場面、食事場面である。すなわち、買い物場面や食事場面では1歳児は2,3歳児と比べて機嫌が悪くなる児が多い傾向がみられたが(それぞれ $\chi^2=3.5, P<.10$, $\chi^2=3.4, P<.10$)、遊び場面では2,3歳児の方が1歳児に比べて機嫌の悪くなる児が多い傾向($\chi^2=3.0, P<.10$)。発達と共に子どもの社会関係が広がることによって、トラブルの原因も家庭内から仲間関係に変わっていくようである。

5. 性差 全ての得点において性差はみられなかった。

■ 結論

日常生活の様々な場面で子どもの機嫌が悪くなるが、母親にとって大きなストレスとなっているのが買い物場面であった。公衆の面前で子どもの機嫌が悪くなる時、母親は早急にうまく対処する事が求められ、それに対する子どもの反応が子どもの特徴についての母親の評価に影響を与えていた。

付 表

コンフリクト場面面接票

ちゃんが、機嫌が悪くなる時のことについてお聞きします。最近1ヶ月間のちゃんの様子を思い出してお答えください。

1 何かを食べたり飲んだりしていて、ちゃんが機嫌が悪くなることがありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

お母さんはそれに対してどのような気持ちになりますか

どのように対応しますか

方法は？

どのようなタイミングで？

なぜそのように対応したのですか

それに対して、 ちゃんはどうしますか。

機嫌をなおすことが多い なかなか
かなだまらない その時によって
違う

2 お友達やきょうだいと遊んでいて、ちゃんが機嫌が悪くなることがありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

お母さんはそれに対してどのような気持ちになりますか

どのように対応しますか

方法は？

どのようなタイミングで？

なぜそのように対応したのですか

それに対して、 ちゃんはどうしますか。

機嫌をなおすことが多い かなか
かなだまらない その時によって
違う

3 買い物をしている、 ちゃんが機嫌が悪くなることがありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

お母さんはそれに対してどのような気持ちになりますか

どのように対応しますか

方法は？

どのようなタイミングで？

なぜそのように対応したのですか

それに対して、 ちゃんはどうしますか。

機嫌をなおすことが多い かなか
かなだまらない その時によって
違う

4 ちゃんがテレビやビデオを見ていて、機嫌が悪くなることはありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

お母さんはそれに対してどのような気持ちになりますか

どのように対応しますか

方法は？

どのようなタイミングで？

なぜそのように対応したのですか

それに対して、 ちゃんはどうしますか。

機嫌をなおすことが多い かなか
かなだまらない その時によって
違う

5 眠たいときに、 ちゃんが機嫌が悪くなることはありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

そのようなとき、お母さんはどのように感じ、 ちゃんの相手をし、 ちゃんはそれに対してどうしますか。今までの状況と違いはありますか。

6 歯磨き、着替え、トイレ、お風呂などで ちゃんが機嫌が悪くなることはありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

そのようなとき、お母さんはどのように感じ、 ちゃんの相手をし、 ちゃんはそれに対してどうしますか。今までの状況と違いはありますか。

7 お客さんが見えて、 ちゃんが機嫌が悪くなることはありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

そのようなとき、お母さんはどのように感じ、 ちゃんの相手をし、 ちゃんはそれに対してどうしますか。今までの状況と違いはありますか。

8 お医者さんへ行ったとき、 ちゃんが機嫌が悪くなることはありますか。

ある ない

ある人のみ それはどのような時に、どのような状態になりますか

そのようなとき、お母さんはどのように感じ、 ちゃんの相手をし、 ちゃんはそれに対してどうしますか。今までの状況と違いはありますか。

9 このほかに、ちゃんが機嫌が悪くなったり、泣いたり、怒ったりすることはありますか。また、今まででちゃんが機嫌が悪くなり最も苦労したのはどのような状況でしたか（最近1カ月に限らず）。

10 ちゃんがすることで、お母さんが最もいやな気分になることはどのようなことですか

そのようなとき、お母さんはどのように感じ、ちゃんの相手をし、ちゃんはそれに対してどうしますか。今までの状況と違いはありますか。

11 ちゃんをなだめるために、最も有効なのはどのような方法ですか これをすれば、まず間違いなくなだめられるという手段、奥の手などについて

12 ちゃんは怒りっぽい方だと思いますか。次の中から選んで下さい。

とても怒りっぽい 怒りっぽい どちらともいえない 怒りっぽくはない 全く怒りっぽくない

何故、そうなったのだと思いますか。

13 ちゃんは恐がりの方ですか。次の中から選んで下さい。

とても恐がり 恐がり どちらともいえない 恐がりではない 全く恐がりではない

何故、そうなったのだと思いますか。

14 全体として、ちゃんは扱いやすい方ですか。次の中から選んでください。お母さんの主観で結構ですが、もし、他の人に違うようにいわれたことがあるならそれも教えてください。

とても扱いやすい 扱いやすい どちらともいえない 扱いにくい とても扱いにくい

これは、誰かと比較して考えましたか。

比較したとすれば、誰とですか。

15 次の文章は、2歳の子どもの泣いているときの2人の母親の対応について書いたものです。あなたは、おおまかに分けるとして、ご自分がどちらの母親のタイプに近いと思いますか。どちらにも全く当てはまらない場合には、ご自分はどのようなタイプか簡単に説明して下さい。

A 子さんタイプ B 子さんタイプ

あてはまらない

あてはまらないとき

A 子さんタイプ

2歳になったばかりの〇〇〇ちゃんが、転んですこし足をすりむいてしまい、泣いています。その時近くで見ていた母親のA 子さんは、まるで自分が転んだように痛そうな顔をして、「痛い痛いねー。あー、痛かったねー。」といました。

しばらくしてから、けがの様子を調べ、また「あー、ここが痛かったのねえ。痛い痛い。痛い痛いいやだねえ。」などといって抱きしめていると、〇〇〇ちゃんも甘えた様子でお母さんに抱きついていきます。

B 子さんタイプ

2歳になったばかりの〇〇〇ちゃんが、転んですこし足をすりむいてしまい、泣いています。その時近くで見ていた母親のB 子さんは、にっこりして、「あら、ころんじゃったねえ。大丈夫、大丈夫。もう痛くないよ」といいました。しばらくしてから、けがの様子を調べ、また「痛くない痛くない。痛い痛い飛んでけー。」などと言いながら横に座っていると、〇〇〇ちゃんも「イタクナイ」といいながら、お母さんのひざに登ってきます。

16 あなたのお母さまは、前の質問（15番）でいうと、どちらのタイプですか。どちらにも全く当てはまらない場合には、どのようなタイプか簡単に説明して下さい。

A 子さんタイプ B 子さんタイプ

あてはまらない

あてはまらないとき

17 あなたのお父さまは、前の質問（15番）でいうと、どちらのタイプですか。どちらにも全く当てはまらない場合には、どのようなタイプか簡単に説明して下さい。

A 子さんタイプ B 子さんタイプ

あてはまらない

あてはまらないとき

18 ご自分が育てられたときのこと、特にあなたのお母さまの育児が、現在のご自分に何か影響していると考えたことがありますか。次の中から選んで下さい

意識したことはなく影響もない 意識したことはないが影響はあるかもしれない

意識しているが影響はない 意識しているし影響もある

長い時間ご協力ありがとうございました

乳幼児の情緒形成不全の早期発見方法の研究

分担研究者 澤 田 敬
(高知県立西南病院小児科)

研究要旨 乳幼児期に安定した親子関係を確立し、心の安全基地(ボールビー)を作ることで、思春期以後の精神的混乱の大部分は予防できる。この目的を果たすために幼児期に満たされていない心の叫びや、乳幼児期の不十分な親子関係を早期に発見し、早期に適切な介入をする事が大切である。

1) 幼児は心的外傷を受けストレスが貯まると心身症、気になる癖、異常行動(以下まとめて心身症とする)となる¹⁾。心身症は「このままでは一人前の大人になれません。助けて下さい」という心の叫びだと言われている²⁾。親子関係で心が満たされると心身症は消失する³⁾。幼児の心身症を利用したチェックリストを作り、現在保育所で調査中である。

2) 心が満たされなく、心の安全基地を作れない不安定な母子関係を早期に発見するためAIDS尺度⁴⁾を利用し、現在保育所で調査中である。

3) 子どもの心は両親に甘えることで満たされ、ストレスの症状である心身症は消失する。しかし子どもの甘えを十分に受け入れることが出来ない父母がいる。このような父母は三つのタイプに分けられる⁵⁾。

①現在辛いことを抱えて悩んでいる。

②子ども時代に辛いことがあり、その心的外傷が未だに癒されていない。

③子どもにストレスを与える世代間伝達(親は自分が子どもの時代に両親から育てられたと全く同じように、無意識に自分の子どもを育てる)がある。

育児困難な父母のチェックリストを利用し、早期に育児困難な父母を発見し、親子介入する必要がある。現在産科で調査中である。

以上三種のチェックリストを利用し、心が満たされていない幼児、心の響き合いが出来ていない親子、子どもを受け入れる事が出来ない親子を早期に発見し、早期に介入する方法を探っていく予定である。

■ 研究目的

乳幼児は父親母親に温かく holding(抱きかかえ)¹⁾されると、父母に遠慮無く甘えて、喜怒哀楽をぶつけてゆき、父母に対する信頼感を強め、心の安全基地²⁾を作っていく。乳幼児期に安定した親子関係を確立し、心の安全基地を作ることで、最近社会問題になっている思春期以後の精神的混乱の大部分は予防できる³⁾。この目的を果たすために乳幼児期に満たされていない心の叫びや、親子関係を早期に発見し、早期に適切な介入をすることが大切である。今回は幼児期の心の叫びの発見方法、問題のある親子関係の発見方法、育児困難な両親の早期発見方法を探ってみた。

■ 研究方法

1) 幼児は種々の心的外傷を受け、ストレスが貯まると心身症、気になる癖、異常行動(以下まとめて心身症とする)となる。心身症は満たされない心の叫びである⁴⁾。

高知県立西南病院小児科精神衛生外来を受診した乳幼児の心身症を調べ、心身症を利用したチェックリストを作成した。

2) 心が満たされなく、心の安全基地をつくれな不安定な母子関係を早期に発見するためAIDS尺度(表1、図1)⁵⁾の利用方法を、現場の保母を通して調査してみた。

3) 乳幼児の心は父親母親に甘えることで満たされ、ストレスの症状である心身症は消失する¹⁾。しかし子どもの甘えを十分に受け入れることが出来

A I D S R 度

表1

ストレス時の母親-乳幼児愛着指標に関する MASSIE-CAMPBELL R 度
(小児科診察および他のストレスとなる小児ケア場面での使用のため)

A. ストレス状況時の乳幼児の行動					B. 乳幼児のストレスに対する母親の反応					
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	
注 視	1/1 いつも母親の顔から目をそらす。	3/1 時々母親の顔を見ろ。	4/1 しばしば母親の顔を長くまた短く注視する。	5/1 長時間母親の顔に釘づけになる。	X	注 視	1/8 いつも子どもの顔から目をそらす。	3/8 時々子どもの顔を見る。	4/8 しばしば子どもの顔を長く、または短く注視する。	X
発 声	1/2 沈黙。一度も声を上げない。	3/2 時々声を上げる。またはささやく。	4/2 しばしば声を上げ、または強く泣く。	5/2 絶えず声を上げ、またはささやく。	6/2 行動は観察不明	発 声	1/9 沈黙。決して声を発しない。	3/9 時々子どもに声を発する。喉を鳴らす、またはささやく。	4/9 しばしば話しかけ、間中、強く喉を鳴らす。	6/9 行は観察不明
接 触	1/3 決して母親に触れたり、近づいたりしない。	2/3 母親に触れる。	4/3 しばしば母親に近づき触れる。	5/3 時々母親に近づき触れる。	6/3 行動は観察不明	接 触	1/10 決して子どもに触れたり、近づいたりしない。	3/10 時々子どもに触れる。	4/10 しばしば子どもに近づき触れる。	6/10 行は観察不明
(b)	3/4 しばしば母親の接触から身を引く。	3/4 時々母親の接触から身を引く。	4/4 母親の接触から身を引く。	5/4 決して母親の接触から身を引かない。	6/4 行動は観察不明	(b)	3/11 しばしば子どもの接触から身を引く。	3/11 時々子どもの接触から身を引く。	4/11 母親の接触から身を引かない。	6/11 行は観察不明
抱っこ	1/5 乱暴に抱っこに抵抗する；いつも母親から写なりに身を離す。	3/5 母親の腕や肩にもつかない。時々身を離す。	4/5 母親に近づき、または身を離す。	5/5 母親の身体を母親に近づき、または身を離す。	6/5 行動は観察不明	抱っこ	1/12 気分を害して子どもを突き離す。または身体から離して抱く、いない。	3/12 短時間で子どもを胸に保つ。または顔を保持する。	4/12 子どもが静かにならないうち、子どもを胸に保つ。または顔を保持する。	6/12 行は観察不明
感 情	1/6 いつも強く苦悶し、恐れ、または無感動である。	3/6 断続的に不安、または喜び；または無感動である。	4/6 しばしば不安、または喜び；または無感動である。	5/6 いつも微笑して、または無感動である。	6/6 行動は観察不明	感 情	1/13 いつも強く苦悶し、恐れ、または無感動である。	3/13 断続的に不安、または無感動である。	4/13 しばしば不安、または無感動である。	6/13 行は観察不明
接 近 度	1/7 決して身体または視線で母親を避けない；隣の方に行く、または部屋から出ていく。	2/7 母親の視線で母親を避ける。	4/7 しばしば母親の視線を避ける。	5/7 母親の視線を避ける。	6/7 行動は観察不明	接 近 度	1/14 診察室から出ていく。	3/14 断続的に子どもの手の届かない所にいる。	4/14 しばしば子どもの手の届かない所に立ち、または子どもの顔を覗き込む。	6/14 行は観察不明

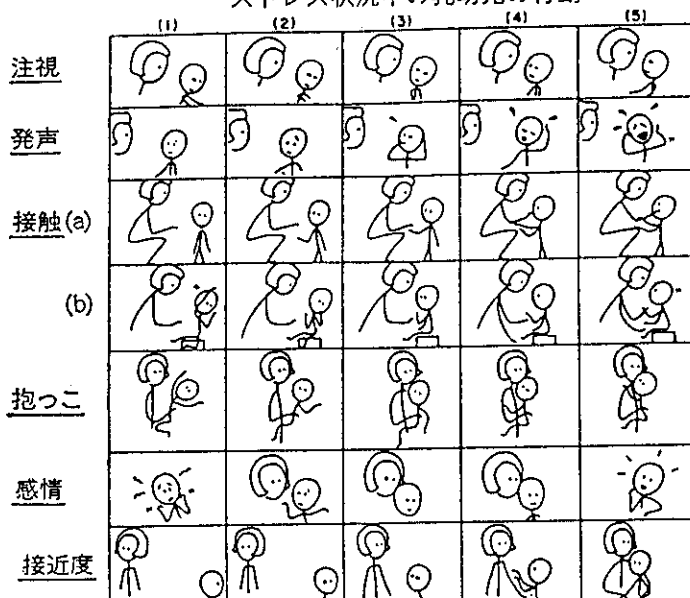
図1

氏名 _____、年齢 _____ 歳、性別 _____、(母子、父子) 関係 _____
 気になる行動、癖 (あれば) :

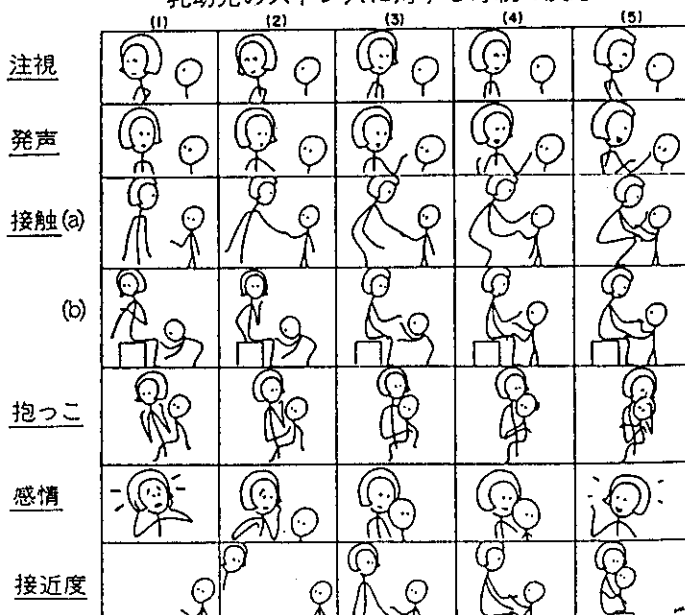
親子を観察し下記の絵で該当するものに0をつけて下さい。

AIDS尺度による母親-乳幼児行動

ストレス状況中の乳幼児の行動



乳幼児のストレスに対する母親の反応



(絵は Mimi Horne による)

ない父母がいる。父親母親がどうして子どもを受け入れられなくなったかを、精神衛生外来を受診した乳幼児の父親、母親を調べその原因をさぐり、そのデータより育児困難な父母の早期発見チェックリストを作成した。

■ 研究結果

1. 幼児のストレスチェックリスト

乳幼児の心身症について調べてみた(表2)。幼児の心身症に対して、親子をone unit、症状を関係

てもらった。児は母に激しく甘え、6日後すっかりよくなった。

症例3 4歳 男児 被虐待

2歳頃より父母が怒鳴る、叩く、蹴る、児の頭を壁に打ちつける。風呂の水の中に頭を突っ込む、山に置き去りにする等虐待あり。3歳保育所入園。園で他の子どもを叩く、噛みつく。自分の頭を壁に打ちつける。友達と遊ばなく、保母に激しく甘えた。父母の虐待は続いたが、保母の介入で父母の虐待回数が徐々に少なくなった。児も父母にだんだんと甘えられるようになった。園で保母への激しい甘

表2 精神衛生外来患者(0~6歳)(平成2年5月~11年2月)

(高知県立西南病院小児科)

		(516名 2つの症状がある場合2人とした)	(%)
1) 腹痛・悪心・嘔吐	118 (22.9)	13) 胸痛・息苦しさ	12 (2.3)
2) チック症	51 (9.9)	14) 吃音	12 (2.3)
3) 下肢痛・しびれ・歩行障害	49 (9.4)	15) 頸部痛	10 (1.9)
4) 頻尿	36 (7.0)	16) 登園・登校をしぶる	9 (1.7)
5) 尿・便失禁	20 (3.9)	17) 指しゃぶり・爪噛み	8 (1.5)
6) 頭痛	19 (3.7)	18) 性的異常行動	7 (1.4)
7) 目線が合わない	19 (3.7)	19) 心的外傷後ストレス障害	7 (1.4)
8) 言語発達遅延	18 (3.5)	20) 被虐待児	7 (1.4)
9) 夜泣き・夜驚症	18 (3.5)	21) 脱毛・抜毛	6 (1.2)
10) 夜尿	18 (3.5)	22) 移行対象	6 (1.2)
11) パニック	17 (3.3)	23) 窃盗	3 (0.5)
12) 食行動異常	13 (2.5)	24) その他	33 (6.4)

性障害ととらえ、抱っこ、おんぶ、添い寝、一緒に風呂に入る、楽しく遊んでやることで心は満たされ、ほとんどの心身症は消失し、その上心の安全基地も強化される。この治療方法を筆者はアタッチメント療法(甘え療法、抱っこ・おんぶ・添い寝・親子入浴療法)⁴⁾と呼んでいる。

症例1 2歳9カ月 男児 排尿障害

24カ月で排便、排尿ともに自立していた。25カ月妹出生。やきもちがひどく妹を叩く、踏みつけるなどし、その都度怒っていた。2歳半頃より家の中、所かまわず排尿する。母が怒れば怒るほどひどくなる。甘えも「おしっこを教えない子は嫌い」と言って拒否していた。母に甘えの全面的受容と児には父母への甘えを勧めた。その日から児は徐々に甘えるようになり、3カ月後排尿異常はすっかり無くなった。

症例2 8歳 女児 ヒステリ・発作

2歳時妹、6歳時弟出生。手がかからなく、お手伝いをよくする良い子だった。学業成績上。突然に傾眠、不穏状態になり入院。拒食、泣き叫ぶ、暴れる、突然に走り回る、尿便失禁あり便を手足口に塗り付ける。立って排尿をする。母に噛みつく。時には全く正常になる。医師看護婦の前では正常になり学校の話をする。母に甘えを全面的に受け入れ

えはずっと続いた。6歳になると他児への攻撃は全く無くなり、友達と遊べるようにもなった。父母の虐待もほとんど無くなった。保母の親子介入は続けていった。現在小学校1年生。特に問題なく、友達ともよく遊び、落ち着いて勉強している。先生への甘えは続いている。

症例のように心身症は、養育者への甘えで心が満たされると消失する。と言うことは心身症を早期に発見して、養育者に甘えさせれば心は満たされ心の安全基地が確立し、思春期以後の精神的混乱の予防になる。

乳幼児心身症統計(表2)を参考にして心身症を応用してのチェックリストを作成した(表3)。今後保育園で試行予定である。

2. 母親-乳幼児愛着関係チェックリスト

子どもはストレスを感じても父母にholdingされると、遠慮なく甘えて、ストレスは消え、心が満たされる。問題は母親がholding出来ているかどうかであり、児が遠慮無く甘えてゆけているかどうかである。母子の愛着関係の調査で、AIDS尺度が使用できるかどうかを保育所保母を対象に調べてみた。

AIDS尺度の説明文を見せず、絵のみを見せ、お

表3 幼児の心身症、気になる癖、異常行動チェックリスト

組 氏名	歳 性別:
子どもの症状で当てはまるものに0を付けて下さい。	
1) 友達と遊べない	20) おねしょ
2) 一人遊びをする	21) お昼寝が出来ない
3) 先生に異常に甘える	22) 寝言、寝ぼけがひどい
4) おもちゃを乱暴に扱う	23) 吃音(どもり)
5) 他児にいじわるをする	24) 胸部痛
6) 先生等大人のご機嫌をとる	25) 息苦しさを訴える
7) いたずらがひどい	26) 頸部痛
8) よく腹痛を訴える	27) 給食を食べれない
9) 吐き気を訴える	28) 好き嫌いが激しい
10) 目をパチパチさす	29) 指しゃぶり
11) 口をひどく曲げる	30) 爪噛み
12) よく足を痛がる	31) 性的異常行動
13) 頻尿	32) 抜毛
14) 尿失禁	33) はんかち、人形、等一つのものを持ち回る
15) 便失禁	34) 通園をしぶる
16) 言葉が遅れている	35) その他気になること
17) ものを言わない	()
18) 話すとき目が合わない	
19) 頭痛を訴える	

互いに相談を一切せず、保母各人の感性で絵に記入してもらった。

①絵を見て最も理想的な母子関係に○印、最も問題の母子関係に×印を付けてもらった。(56名)

○、×の平均点は表4の通りであった。

表4 ストレス状況中の乳幼児の行動

	○	×
注視	5.0	1.1
発声	3.8	2.1
接触(a)	5.0	1.0
(b)	5.0	1.0
抱っこ	4.9	1.1
感情	4.5	1.2
接近度	4.8	1.0

発声で乳幼児の行動にばらつきが有るのは、「甘え」に対するアメリカ文化と日本文化の違いではないかと思われる。

②一人の子どもを、その親子をよく知っている二人の保母が、一切相談をせず、該当する個所に○印を付け、何点の相違があるか調べてみた。(25組)

表5の通り2点以上の差は無いことが分かった。

説明文を読めばもっと信頼性は高まると思われるため、AIDS尺度は保育所で実用可能と思われる。保育所で試行予定である。

3. 育児困難な父母のチェックリスト

子どもを受け入れることが出来ない父親母親は三つのタイプに分けられることが分かった。

①現在辛い思いをしている。

乳幼児のストレスに対する母親の反応

	○	×
	5.0	1.0
	5.0	1.0
	5.0	1.1
	4.9	1.0
	4.9	1.0
	4.8	1.0
	4.9	1.0

症例 4歳 男児 チック症

3カ月前より、妹をいじめ、目をぱちぱちさせ口をゆがめたりする。母はいらいらして子どもをholding出来ていない。話を聞くと、父親(36歳)が胃癌になり手術不可能となり、いま入院中と言う。6カ月後父死亡。1年後母も落ち着き児は母に甘えるようになり症状も無くなった。

②子ども時代に辛いことがあり、その心的外傷がいまだに癒されていない。

症例 4歳 男児 頻尿

以前より頻尿があり最近ひどくなった。いつも

	ストレス状況中の乳幼児の行動	乳幼児のストレスに対する母親の反応
注視	0.1	0.6
発声	1.1	0.8
接触 (a)	0.6	0.4
(b)	0.6	0.8
抱っこ	1.0	1.0
感情	1.5	0.8
接近度	1.0	0.8

表6 育児困難な父母に対するチェックリスト

氏名 _____ 年齢 歳 夫の年齢 歳 結婚後 年
 当てはまるものに0(複数可)、()内には適当に記入して下さい。

A) 現在

1) 何でも相談できる友達: いる いない

2) 今回の妊娠について: 嬉しい 嬉しくない

3) 今の子ども: ()人 可愛い 可愛くない 時々うるさくなる

4) 家事・育児などに対する夫の協力: 十分 不十分 全く無し
 夫とお腹の中の赤ちゃんのことや上の子どものことを: 良く話し合う
 時々話し合う 全く話し合わない

5) 家庭内の気になること: 無 有 (経済的なこと 子どものこと 夫のこと
 あなたの父母のこと 夫の父母のこと 病人のこと その他)

6) あなたの父親: 関係がうまくいっている うまくいっていない 同居 別居 死別
 母親: 関係がうまくいっている うまくいっていない 同居 別居 死別

7) 夫の父親: 関係がうまくいっている うまくいっていない 同居 別居 死別
 母親: 関係がうまくいっている うまくいっていない 同居 別居 死別

B) あなたや夫は、子ども時代をどのように過ごしたでしょうか

1) あなたが子どもの時、あなたに対して

あなたの父親: やさしかった こわかった 相手になってくれた
 相手になってくれなかった 子ども時代離別
 母親: やさしかった こわかった 相手になってくれた
 相手になってくれなかった 子ども時代離別

あなたの兄弟姉妹: ()内に男女を書きあなたのところに0をつけて下さい
 1 ()、2 ()、3 ()、4 ()、5 ()、6 ()

あなたと兄弟姉妹: 一緒によく遊んだ 一緒に遊ばなかった
 弟または妹の子守をよくした

父母以外の人に育てられた: 祖父母(父方 母方) 親戚(父方 母方) 施設

子ども時代: 楽しかった 辛いことが多かった 友達とよく遊んだ
 ままごと遊びをよくした 人形遊びをよくした
 赤ちゃんの世話をよくした

2) 夫の話から想像して夫が子どもの時、夫に対して

夫の父親: やさしかった こわかった 相手になってくれた
 相手になってくれなかった

夫の母親: やさしかった こわかった 相手になってくれた
 相手になってくれなかった

夫の兄弟姉妹: ()内に男女を書き夫のところに0をつけて下さい
 1 ()、2 ()、3 ()、4 ()、5 ()、6 ()

夫と兄弟姉妹: 一緒によく遊んだ 一緒に遊ばなかった 子守をよくした

父母以外の人に育てられた: 祖父母(父方 母方) 親戚(父方 母方) 施設

子ども時代: 楽しかった 辛いことが多かった 友達とよく遊んだ
 ままごと遊びをよくした 人形遊びをよくした
 赤ちゃんの世話をよくした

落ち着きが無くいらしている。父38歳。父の父親は厳しく、すぐ暴力をふるい怖かった。母親は父親の言うなりで、父親の暴力から子どもを守ってくれなかった。思い出すと今でも腹が立つと言う。父は子ども（3人）が言うことをきかないと、怒鳴りつけ、すぐ叩く。児はすごく怖がる。母が止めても聞き入れない。時には母にも暴力がある。半年後父母離婚。祖父母に助けられ母は子どもを受け入れ、児も母に甘えるようになった。1年後児は落ち着き頻尿も無くなった。

③子どもにストレスを与える世代間伝達がある。（親は自分が子ども時代に養育者から育てられたと同じように、無意識に子どもを育てる）。

症例 5歳 女児 落ち着きがない

母が「この子は最近落ち着きがない」と言って来院。聞くと1歳から早期教育塾に通い、2歳8カ月から、ピアノ、英会話にも通っているという。児はお利口で母に甘えない。児に聞くともっと母に抱っこしてもらいたい、友達と遊びたいという。母の母親も教育熱心で、3歳から塾に行きいろいろの事を習った。そのお陰で良い進学中学、進学高校に通え、良い大学に行けたという。児の気持ちを説明し塾を少なくし、甘えを受け入れてもらうことに

した。児は大分母に甘えるようになり、大分落ち着きも出来てきている。

このような症例を検討して育児困難父母を早期に発見するチェックリストを作った（表3）。産婦人科で試行予定である。

■ 考案及び結び

最近の思春期以後の精神的混乱は、想像を絶するものがある。その異常行動は低年齢化し小学生にも混乱が起こっている。このような精神的混乱は起こってからでは対応が非常に難しくなる。なんとしてでも予防しなくてはならない。予防するには幼児期の豊かな心の発達が大切である。

早期に幼児の心の叫びをキャッチするため、また心の響き合いがスムーズにいけない親子を早期に見つけるため、そして育児困難な父母に対してその原因を早期に見つけるため3種類のチェックリストを作成し検討してみた。その結果3種類とも実用可能と思われたため、今後保育所、病院産婦人科で施行してみる予定である。実用可能と実証されれば、これらを使用しリスク症例を早期に見つけ、早期の治療的介入方法について検討してゆく予定である。

参考文献

- 1) D.W.Winnicott (牛島定信 訳)：情緒発達の世界分析理論、岩崎学術出版社、1977
- 2) J.Bowlby、(二木武 監訳)：母と子のアタッチメント、医歯薬出版株式会社、1993
- 3) 岡野憲一郎：外傷性精神障害、岩崎出版株式会社、1995
- 4) 澤田敬：乳幼児の心身症、小児科診療 61 175-181、1998
- 5) H.N Massie(生田憲生 訳)：ストレス時の母親-乳幼児愛着指標に関する Massie-Campbell 尺度 (AIDS 尺度)、J.D Call et al. (小此木啓吾 監訳) 乳幼児精神医学 384-419、1988